

鹿児島湾北部の天降川河口から得られた標本に基づく 国内南限記録のトサカギンポ

畑瑛之郎¹・田島奏一朗²・樋之口蓉子²・本村浩之³

Author & Article Info

¹ 鹿児島大学大学院農林水産学研究所 (鹿児島市)
eishiro.hata@gmail.com

² 特定非営利活動法人くすの木自然館 (始良市)

³ 鹿児島大学総合研究博物館 (鹿児島市)
motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp (corresponding author)

Received 11 October 2023

Revised 16 October 2023

Accepted 22 October 2023

Published 23 October 2023

DOI 10.34583/ichthy.37.0_6

Eishiro Hata, Soichiro Tashima, Yoko Hinokuchi and Hiroyuki Motomura. 2023. Southernmost Japanese record of *Omobranchus fasciolatoceps* (Blenniidae) from the mouth of Amori River, northern Kagoshima Bay, Kagoshima Prefecture, Kyushu, Japan. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 37: 6–9.

Abstract

A single specimen of a temperate blenny *Omobranchus fasciolatoceps* (Richardson, 1846) (Blenniidae) was collected from the mouth of Amori River, Kyushu, Japan. In Japanese waters, *O. fasciolatoceps* has been previously recorded from Toyama Prefecture to the west coast of Kyushu on the Sea of Japan and East China Sea coasts, Tokyo Bay to Miyazaki Prefecture on the Pacific coast, and the Seto Island Sea. Thus, the Aira River specimen represents the first record from Kagoshima Bay as well as the southernmost record for the species in Japanese waters.

イソギンポ科ナベカ族ナベカ属 (Blenniidae: Omobranchini: *Omobranchus*) は現在 22 有効種知られており (Rao, 1973; Springer and Gomon, 1975; Springer, 1981), そのうち日本からは 6 種 [ナベカ *O. elegans* (Steindachner, 1876), ゴマクモギンポ *O. elongatus* (Peters, 1855), トサカギンポ *O. fasciolatoceps* (Richardson, 1846), カワギンポ *O. ferox* (Herre, 1927), クモギンポ *O. loxozonus* (Jordan and Starks, 1906), およびイダテンギンポ *O. punctatus* (Valenciennes, 1836)] が知られている (藍澤・土居内, 2013; 本村, 2023). トサカギンポは内湾や河口の岩礁, カキ殻に生息し, 国内では富山県から九州西岸までの日本海・東シナ海沿岸, 東京湾から宮崎県までの太平洋沿岸, および瀬戸内海に分布し, 国外では台湾および福建省からマカオにいたる中国大陸沿

岸に分布することが知られている (藍澤・土居内, 2013; 小林ほか, 2018).

2023 年 4 月 18 日, 鹿児島湾にそそぐ天降川の河口から 1 個体のトサカギンポが採集された. 本種の鹿児島県内における記録は少なく, 鹿児島県レッドデータブックにおいて準絶滅危惧に選定されている (米沢・四宮, 2016). 本標本は鹿児島湾におけるトサカギンポの初記録であるとともに, 標本に基づく国内南限記録であるため, ここに報告する.

材料と方法

計数と計測は Springer and Gomon (1975) と小林ほか (2018) にしたがった. 計測はノギスを用いて 0.1 mm 単位まで行った. 標準体長 (standard length) は体長あるいは SL と表記した. 側線付近の器官に対する名称は小林ほか (2018) にしたがった. 標本の作製, 登録, 撮影, および固定方法は本村 (2009) に準拠した. 生鮮時の体色の記載は, 固定前に撮影されたカラー写真 (Fig. 1) に基づく. 本報告で用いられた標本は, 鹿児島大学総合研究博物館 (KAUM) に保管されており上記の生鮮時の写真は同館のデータベースに登録されている.

Omobranchus fasciolatoceps (Richardson, 1846)

トサカギンポ

(Fig. 1; Table 1)

標本 KAUM-I. 183058, 体長 37.1 mm, 鹿児島県霧島市隼人町住吉天降川河口, 手網, 0.6 m, 2023 年 4 月 18 日, 田島奏一朗.

記載 各体部の計数形質と体長および頭長に対する割合を Table 1 に示した. 体は側扁し, 前後方向に細長い. 鱗はない. 頭部背面に発達した鶏冠状の正中線皮弁がある. 体背縁は吻端から正中線皮弁の最上部にかけて急激に上昇し, そこから正中線皮弁後端にかけて下降する. 背鰭起部は正中線皮弁のやや後方にある. 背鰭起部から第 4 背



Fig. 1. Fresh specimen (KAUM-I. 183058, 37.1 mm SL) of *Omobranchus fasciolatoceps* from the mouth of Amori River, northern Kagoshima Bay, Kagoshima Prefecture, Kyushu, Japan.

鱗棘条基部にかけて緩やかに上昇し、そこから尾柄部にかけて緩やかに下降する。体腹縁は下顎先端から肛門にかけて緩やかに下降し、そこから尾柄部にかけて緩やかに上昇する。口は垂端位で、上顎が下顎より突出する。上顎後端は瞳孔直下付近に位置する。両顎に扁平な切歯状歯が並び、上顎後端に1本の犬歯状歯をもつ。下唇の皮弁は半月状で口内に収納されている。鰓孔は胸鰭基底の上端より上に小さく開孔する。鰓膜は峡部でつながる。上側頭管背中線上の開孔数 (median supratemporal commissural pore) は1で、正中線皮弁基底後端の後ろに開孔する。前鰓蓋管 (preopercular pores) には5開孔がある。鼻域孔 (nasal pores) がある。後耳管 (posterior otic pore) の開孔はない。最後の側線管は背鰭第10棘直下に位置する。背鰭起部は腹鰭基底後端の上方に位置し、背鰭棘条部はそこから臀鰭第2軟条の上方まで伸び、背鰭軟条部はそこから尾鰭基部下端直前まで伸びる。背鰭棘条部と背鰭軟条部の境界に明瞭な欠刻はなく、背鰭は第5棘条部で最も高くなる。臀鰭起部は肛門直後に位置し、臀鰭基底後端は尾鰭基部下端直前に達する。臀鰭第1棘は皮下に埋没する。背鰭と臀鰭の最終軟条は鰭膜で尾柄と癒合する。胸鰭基底は背鰭第2棘直下に位置する。胸鰭後端は肛門直上付近に位置する。腹鰭起部は腹面の鰓孔の直後に位置し、背鰭起部よりやや前方にある。尾鰭は円形。

色彩 生鮮時の色彩 (Fig. 1) — 体部は一様にこげ茶色。正中線皮弁は緑がかった茶色。頭部は一様に黒褐色を呈し、正中線皮弁の後半部から眼後縁を通り、頭部下端にかけて茶色がかった黄色横帯がある。虹彩は茶色がかった黒色。背鰭は一様に薄い茶色で、第1軟条から第6軟条にかけて眼径の2倍ほどの大きさでやや縦に長い1黒色斑をもつ。また背鰭棘条部の鰭膜には茶色がかった不明瞭な黄色縦線が2本あり、背鰭軟条部の鰭膜には後方に向かい上昇する茶褐色斜線が複数ある。臀鰭は薄い茶色で後方につれ灰色

になる。胸鰭は白みがかった黄色の半透明で、鰭条先端はやや黒みがかかる。腹鰭は茶褐色がかった黄色で、先端へ向かうほど淡い。尾鰭は灰色で鰭条は白みがかった黄色。

分布 本種は日本から中国のマカオにかけて分布し (藍澤・土居内, 2013), 日本国内では富山湾, 若狭湾, 兵庫県城崎, 山口県日本海沿岸, 福岡県津屋崎, 熊本県天草, および鹿児島県高尾野川・八房川・万之瀬川の日本海・東シナ海沿岸, 東京湾, 静岡県浜名湖から宮崎県にかけての太平洋沿岸, および瀬戸内海から記録されている (藍澤・土居内, 2013; Iwatsuki et al., 2017; 小林ほか, 2018; 村瀬, 2019, 2022; 荒尾ほか, 2020; 荒木, 2020; 森口・山川, 2020; 川間ほか, 2022; 吉郷, 2022; 柏尾ほか, 2022)。本研究により, 新たに鹿児島湾から記録された。

備考 本標本は頭部に鶏冠状の正中線皮弁をもつこと, 下唇に半月状の皮弁があること, 鰓孔は胸鰭の最上軟条の基部よりも上に開孔すること, 背鰭が12棘20軟条であること, 臀鰭が2棘22軟条であること, 側線管数 (lateral-line tubes) が4であること, 鼻域孔があること, 眼隔管の開孔数 (interorbital pores) が2であること, 眼下管の開孔数 (circumorbital pores) が8であることから, Springer and Gomon (1975), 藍澤・土居内 (2013), および小林ほか (2018) が示したトサカギンポ *Omobranchus fasciolatoceps* の標徴と一致したため, 本種に同定された。本標本は体部に暗色横帯がないことや臀鰭第1棘が埋没することが小林ほか (2018) の示した雌の特徴におおむね一致するため, 雌個体である可能性が高い。

トサカギンポはカキ殻の中に生息することが知られ (Springer and Gomon, 1975; 藍澤・土居内, 2013; 小林ほか, 2018), 本標本も同様に天降川河口の水深0.6 mのロープに付着したカキ殻内から採集された。

トサカギンポの国内における分布状況は上述のとおりである。本種の鹿児島県内における分布は, 米沢 (2003)

が鹿児島県レッドデータブック 2003 において、「薩摩・大隅地方が分布南限」としたものが最も古いと考えられる。その後、米沢・四宮 (2016) は鹿児島県レッドデータブック 2016 において、本種が「八房川および万之瀬川の河口干潟からのみ知られている」とし、県内における生息情報を詳述するとともに大隅地方を本種の分布から除外した。米沢・四宮 (2016) は南さつま市産の本種の生鮮時写真を掲載しているが、その記述から掲載個体は万之瀬川産と考

えられる。荒木 (2020) は上記の産地に加えて、八代海へ流入する高尾野川の河口域から得られた 1 個体を報告した。したがって、鹿児島県内における本種の生息情報は、標本に基づく高尾野川 (荒木, 2020)、文献情報に基づく八房川と万之瀬川 (米沢・四宮, 2016) に限られていた。したがって、本研究において得られた標本がトサカギンボの鹿児島湾初記録であるとともに、国内における標本に基づく本種の南限記録である。なお、トサカギンボは 2018 年 9 月と 2023 年 7 月 28 日にもそれぞれ 1 個体が始良市の重富漁港と天降川河口から採集され、重富海岸自然ふれあい館なぎさミュージアム館内の水槽で飼育展示されている (前者は 2021 年 1 月に死亡)。

Table 1. Counts and measurements, expressed as percentage of standard length, of specimen of *Omobranchus fasciolatoceps* from mouth of Amori River, Hayatocho-Sumiyoshi, Kirishima, Kagoshima, Japan.

	KAUM-I. 183058
Standard length (SL; mm)	37.1
Counts	
Dorsal-fin rays	XII, 20
Total dorsal-fin rays	32
Anal-fin rays	II, 22
Pectoral-fin rays	13
Pelvic-fin rays	I, 2
Segmented caudal-fin rays (dorsal, ventral)	7, 6
Lateral-line tubes	4
Interorbital pores	2
Nasal pores	2
Circumorbital pores	8
Median supratemporal commissural pore	1
Supratemporal pores	5
Preopercular pores	5
Mandibular pores	3
Measurements	
As % of standard length	
Total length	122.4
Head length	26.1
Body depth	21.6
Orbit diameter	6.2
Interorbital width	2.7
Snout length	7.3
Gill opening length	5.4
Length of dorsal-fin base	81.1
Length of anal-fin base	50.9
Predorsal length	23.7
Preanal length	45.6
Pectoral-fin length	24.3
Pelvic-fin length	17.5
Length of 1st dorsal-fin spine	8.1
Length of longest dorsal-fin spine (6 spine)	12.4
Length of 1st dorsal-fin ray	11.3
Length of longest dorsal-fin ray (13th ray)	16.7
Length of 1st anal-fin spine	—
Length of 2nd anal-fin spine	3.5
Length of longest anal-fin ray (15th ray)	10.0
Length of head-crest origin to the top	12.1
Length of head-crest base	12.9
As % of head length	
Orbit diameter	23.7
Interorbital width	10.3
Snout length	27.8
Gill opening length	20.6
Length of head-crest origin to the top	44.3
Length of head-crest base	49.5

謝 辞

本稿を取りまとめにあたり、鹿児島大学総合研究博物館のボランティアと同魚類分類学研究室の学生のみなさまには、標本の作製および登録作業において協力をいただいた。同研究室の是枝伶旺氏には本稿に対して適切な助言をいただいた。Ichthy 担当編集委員の吉田朋弘氏には原稿に対して適切な助言をいただいた。以上の方々に謹んで感謝の意を表す。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は公益財団法人日本海事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」、JSPS 科研費 (20H03311・21H03651)、JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形成型 (CREPSUM JPJSCCB20200009)、文部科学省機能強化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」、および鹿児島大学のミッション実現戦略分事業 (奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル) の援助を受けた。

引用文献

- 藍澤正宏・土居内龍. 2013. イソギンボ科, pp. 1295–1324, 2101. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第 3 版. 東海大学出版会, 秦野.
- 荒木萌里. 2020. トサカギンボ, p. 85. 本村浩之・山本智子・田金秀一郎 (編) 鹿児島県北西部 不知火海にそそぐ 高尾野川河口周辺の生きものたち. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. [URL](#)
- 荒尾一樹・馬渡和華・大原庄史・風呂田利夫. 2020. 東京湾内湾の谷津干潟の魚類相-II. 神奈川自然誌資料, 41: 61–70. [URL](#)
- Iwatsuki, Y., H. Nagino, F. Tanaka, H. Wada, K. Tanahara, M. Wada, H. Tanaka, K. Hidaka and S. Kimura. 2017. Annotated checklist of marine and freshwater fishes in the Hyuga Nada area, southwestern Japan. Bulletin of the Graduate School of Bioresources, Mie University, 43: 27–55. [URL](#)
- 柏尾 翔・花崎勝司・児嶋 格・大古場正・山田浩二・大島麻里. 2022. 岸和田市阪南 2 区人工干潟における魚類および貝類, 甲殻類相について (2015 年度–2020 年度の調査記録). きしわだ自然資料館研究報告, 7: 1–12. [URL](#)
- 川間公達・藤原恭司・是枝伶旺. 2022. イソギンボ科, pp. 225–231. 岩坪洗樹・伊東正英・山田守彦・本村浩之 (編) 薩摩半島沿岸の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 枕崎・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.

- 小林優也・阪本竜也・三木涼平・和田正昭・村瀬敦宣. 2018. 宮崎県北部で採集されたイソギンポ科魚類トサカギンポ *Omobranchus fasciolatoceps* の記録. 日本生物地理学会会報, 73: 195–200.
- 森口宏明・山川宇宙. 2020. 静岡県におけるトサカギンポの追加記録. 南紀生物, 62: 176–179.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp. [URL](#)
- 本村浩之. 2023. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. Online ver. 22. [URL](#)
- 村瀬敦宣. 2019. 宮崎県北部門川湾周辺の魚類多様性. 宮崎の自然と環境, 4: 52–58.
- 村瀬敦宣. 2022. トサカギンポ, p. 199. 村瀬敦宣・緒方悠輝也・山崎裕太・三木涼平・和田正昭・瀬能 宏 (編) 新・門川の魚図鑑 ひむかの海の魚たち. 宮崎大学農学部附属フィールド科学教育研究センター延岡フィールド, 延岡.
- Rao, V. V. 1973. Blennioid fishes from Godavari Estuary. Journal of the Bombay Natural History Society, 70: 480–487.
- Springer, V. G. 1981. Notes on blennioid fishes of the tribe Omobranchini, with descriptions of two new species. Proceedings of the Biological Society of Washington, 94: 699–707. [URL](#)
- Springer, V. G. and M. F. Gomon. 1975. Revision of the blennioid fish genus *Omobranchus* with descriptions of three new species and notes on other species of the tribe Omobranchini. Smithsonian Contributions to Zoology, 177: i–iii + 1–135. [URL](#)
- 米沢俊彦. 2003. 分布特性上重要, pp. 154–158. 鹿児島県環境生活部環境保護課 (編) 鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物動物編 — 鹿児島県レッドデータブック —. 財団法人鹿児島県環境技術協会, 鹿児島.
- 米沢俊彦・四宮明彦. 2016. トサカギンポ, p. 87. 鹿児島県環境林務部自然保護課 (編) 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 鹿児島県レッドデータブック 2016. 一般財団法人鹿児島県環境技術協会, 鹿児島.
- 吉郷英範. 2022. トサカギンポ・イダテンギンポ, p. 48. 近藤祐介・大塚 攻・佐藤正典 (編) ハチの干潟の生きものたち 広島県竹原市に残る瀬戸内海の内海原風景. ネクパブ・オーサーズプレス, 東京.